

大学史編纂課だより

第9号

2015年9月25日 発行

目次

特集 戦時期の日本大学

◇福岡県での学徒兵関係調査……………	2	◇終戦と学徒 後編①……………	5
◇工学部出身学徒兵の資料が寄贈される……………	3	◇学徒出征数調査報告……………	5



昭和20年2月、明治基地にて（立っている左から2人目伊熊二郎、3人目池田一彦）。

零戦で特攻戦死した伊熊二郎

伊熊二郎は、昭和18（1943）年9月日本大学専門部商科を卒業。在学中に海軍予備学生を受験し、第13期飛行専修予備学生に採用されました。10月に入隊した三重海軍航空隊で基礎教育、台南海軍航空隊（台湾）で零式艦上戦闘機（通称零戦＝ゼロ戦）の訓練を受けました。その後、愛知県碧海郡明治村（現安城市）の明治基地の第210海軍航空隊に配属されました。

昭和20年、沖縄戦が始まると第210海軍航空隊は鹿児島県の第二国分基地、続いて第一国分基地に移動しました。伊熊は神風特別攻撃隊に志願し、4月11日、爆弾を積んだ零戦で沖縄東方洋上の機動部隊に突入しました。

2葉の写真は、第13期飛行専修予備学生出身で第210海軍航空隊でも伊熊と同僚だった池田一彦氏が所蔵しているアルバムのものです（次頁参照）。



伊熊二郎（海軍搭乗員服姿）

福岡県での学徒兵関係調査



筑前町立大刀洗平和記念館



荻野益男海軍大尉（当時）

平成27年6月10日、福岡県朝倉郡筑前町の大刀洗^{たちあらい}平和記念館で、学徒兵に関する調査を実施しました。同館は、昭和18（1943）年に高等教育機関出身者を対象に採用した第1期陸軍特別操縦見習士官の教育の拠点であった、大刀洗陸軍飛行学校本校の跡地に建てられており、特別操縦見習士官関係の刊行物などを所蔵しています。それらから、第1期生3名・第3期生10名の日本大学出身者を確認することができ、併せて、周辺の飛行学校関係遺構調査も実施しました。

翌11日、同館山本寛館長の紹介で、福岡県福岡市在住の池田^{いけだいちひこ}一彦元海軍中尉を訪問しました。池田氏は長崎高商出身の第13期海軍飛行専修予備学生。海軍時代の写真を多数所有しており、日本大学関係では、表紙で掲載した2葉を含めた伊熊^{いくまじろう}二郎が写った写真4葉。基礎教育を受けた三重海軍航空隊時代の写真では、同班だった法文学部出身の星野正雄や、僅か5名（第13期生は約5,000名）の第1期海軍航空予備学生の一人で、池田・星野らの教官を務めた荻野益男の写真を確認できました。

また、日本大学関係で戦後も交流のある同期生や、そのご遺族の消息を伺うことが出来ました。

（高橋）



大刀洗陸軍飛行学校本校の正門

戦時下の箱根駅伝

箱根駅伝は、昭和15（1940）年1月に第21回大会が行われた後、中国との戦争の影響で中止されました。その代わりとして、昭和16年1月と11月に、明治神宮から青梅までを往復する青梅駅伝が2回開催されています。

戦争は、昭和16年12月に米・英など連合軍に対する戦いへと拡大しました。戦争の影響で昭和17年にスポーツ組織は改編され、関東学生陸上競技連盟（関東学連）は、大日本学徒体育振興会陸上戦技部の下部組織となりました。昭和18年になると、スポーツ競技の全国大会の開催は困難となりました。

このような時代状況でしたが、関東学連は2年間箱根駅伝を実施していないことから、大会が途切れてしまうことを危惧し、大日本学徒体育振興会に箱根駅伝の開催を働きかけました。反対する軍部にねばり強く交渉を重ね、「戦勝祈願」を名目に、靖国神社から箱根神社を往復するというので、了承を得ることができました。



このようにして、昭和18年1月5～6日に、3年振りに第22回箱根駅伝が開催され、日本大学・青山学院大学・慶應義塾大学・専修大学・拓殖大学・中央大学・東京農業大学・東京文理科大学（現筑波大学）・法政大学・立教大学・早稲田大学の11校が出場しました。優勝したのは日本大学でしたが、ゴールに飛び込んでくる選手を、最後まで各大学関係者が拍手と歓声で迎えました。

写真は、現在日本大学陸上競技部が所蔵している優勝楯です。「KGRR」という関東学連のマークが記載され、「2603」という数字は昭和18年の皇紀を表しています。この駅伝を走った選手の多くはその後学徒出陣し、戦死した選手も少なくありません。この優勝楯は、当時の時代と選手の思いを伝える貴重な資料となっています。

(小松)

工学部出身学徒兵の資料が寄贈される



佐藤吉人
(陸軍一等兵軍装)

平成26年5月、埼玉県川越市在住の佐藤陽子氏から、父吉人氏の資料26点が寄贈されました。佐藤吉人は、大正7（1918）年1月東京市淀橋区に生まれ、獨逸学協会中学校・日本大学予科理科を経て、昭和17（1942）年4月、日本大学工学部（現理工学部）工業化学科に入学しています。

在学中の昭和19年3月東部第88部隊（電信第1連隊）に入営、翌4月には満州第7589部隊（電信第17連隊）に転属します。終戦後ソビエト軍に抑留され、収容所での生活を送り、昭和24年10月復員しています。

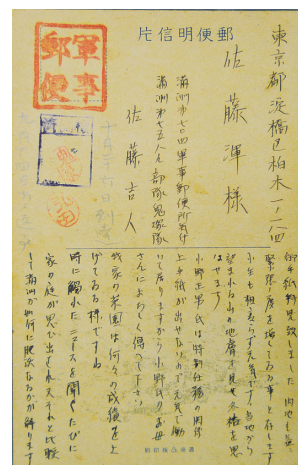
資料は、封筒に入った陸軍時代の写真2葉、卒業証書、満州から家族に宛てた軍事郵便17通とシベリアの収容所からの俘虜用郵便はがき3通。昭和18年11月に入営した、工業化学科の同級生樋口泰一から吉人の父渾に宛てた軍事郵便2通です。シベリアからののはがきは、内容がカタカナで書かれています。ソビエトの検閲担当者がカタカナしか読めなかったためでした。



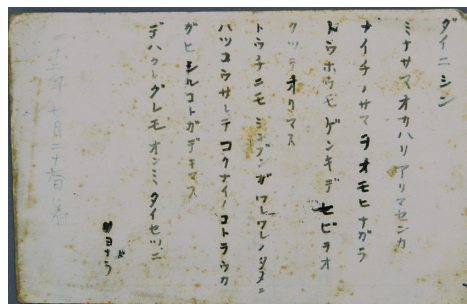
陸軍での集合写真
(前列右端 佐藤吉人)

寄贈に際して陽子氏から、昭和19年9月30日付の卒業証書は、父が出征中のため祖父の渾が大学まで取りに行ったこと、シベリア俘虜はがきは往復はがきになっているが、家族からシベリアへの返信はまったく届かず、帰国するまで消息が分らなかったことなど、父から聞いた当時のエピソードを伺いました。

(高橋)



父渾宛 軍事郵便



内容がカタカナで書かれた
シベリアからののはがき

昭和18年度夏期の学徒勤労働員

昭和18（1943）年は、いわゆる「学徒出陣」が行われた年ですが、学徒勤労働員にとっても転機となっています。学徒勤労働員とは、昭和12（1937）年に勃発した日中戦争直後から、工場や農村での労働力不足を補うため、学生・生徒を土木工事・食糧の増産・軍需物資の生産・医療衛生活動に従事させたことをいいます。当初は修練・錬成を目的として、夏期休暇中などに短期間実施されました。

昭和18年度夏期期間の勤労働員

部 科 名	月 日	作業場所・会社名	出勤人数	日 数	合計人数
法文学科	7月5日・9日・14日、8月1日～3日	六会農場	100	6	600
	7月31日～8月10日	日本鋼管鶴見工場	50	10	500
	8月11日～18日	赤羽被服本廠	300	7	2,100
	8月23日～30日	小金井大緑地	100	7	700
商経学科	8月4日～6日	六会農場	100	3	300
	8月7日～12日	神代大緑地	250	5	1,250
	8月26日～9月2日	赤羽被服本廠	300	7	2,100
歯科	8月13日～17日	六会農場	200	4	800
	8月23日～25日	赤羽被服本廠	300	3	900
医学科	8月7日～12日	砧大緑地	250	3	750
	8月18日～20日	六会農場	200	3	600
	8月19日～21日	赤羽被服本廠	300	3	900
世田谷予科	9月4日～6日	赤羽被服本廠	300	2	600
農学部予科	9月3日	赤羽被服本廠	300	1	300
芸術科	7月20日～30日	日本鋼管鶴見工場	50	10	500
	8月21日・31日	六会農場	100	2	200
	9月7日・8日	赤羽被服本廠	300	2	600
拓殖科	7月6日・8日・10日	六会農場	200	3	600
	7月13日・15日～19日	六会農場	100	7	700

（注）日曜日はほぼ出勤していない。

* 『教務関係綴』より作成。

しかし、連合軍との戦争の悪化にともない労働力不足が深刻となると、昭和18年6月に学徒勤労働員が強化され、この年から夏期休暇は廃止となりました。表は、日本大学の夏期期間における勤労働員予定を、部科ごとにまとめたものです。工学部や専門部工科に関しては、日頃から工場で実習を行っているため除かれました。

軍需工場では、日本鋼管鶴見工場や赤羽被服本廠、農場では、農学部（現生物資源科学部）の六会農場、東京府の小金井大緑地・神代大緑地・砧大緑地に派遣されました。勤労作業の割り当てにもれた学徒に対しては、戦力増産に役立つ作業を自由に選択して、10日間以上奉仕することを命じています。

昭和18年10月には、1年のうち4ヵ月が作業に充てられることとなり、翌19年2月から通年動員が実施されました。作業内容は多様化・重労働化し、事故や空襲による死傷者も少なくありませんでした。

（小松）



勤労作業

終戦と学徒 後編①

前編では、終戦直前に命を失った勤労働員の学徒について取り上げました。後編では、死を覚悟して出征したにもかかわらず、終戦により運命が変わった2人の学徒兵について2回にわたり取り上げます。

石岡貢は、青森県の（旧制）弘前中学校から日本大学専門部商科に入学し、柔道部員として全日本レベルの活躍をしていました。昭和17（1942）年4月には法文学部法律学科に進学しましたが、18年10月の「在学徴集延期臨時特例」により徴兵検査を受け合格しました。10月21日の神宮外苑競技場の壮行会には、雨の中履いて行く靴もなかったため不参加でしたが、11月17日の、小石川後楽園球場での日本大学学徒出陣壮行式には参加しました。

12月10日、二等水兵として横須賀第二海兵団に入団しました。新兵でしたが、柔道選手として名が知られていたため、海兵団の柔道部員たちからは酒を振舞われるなど、かわいがられたそうです。

予備学生を受験、第4期兵科予備学生に合格し、昭和19年2月からは、引き続き武山海兵団（横須賀第二海兵団を改編）で、海軍士官としての基礎教育を受けました。教育修了間近に専攻術科が決まり、水雷専攻を命じられ、長崎県川棚町の水雷学校分校兼臨時魚雷艇訓練所で訓練を受け、12月25日、海軍少尉に任官しました。

正月の帰省休暇から帰ると、魚雷を改造した水中特攻兵器「回天」の部隊への配属

が決まっていました。最初は山口県の光基地、続いて同県内の平生基地に配属されました。

訓練中の事故により膝に水がたまり、基地の軍医長の診察を受けましたが、彼の専門は精神科であったため満足な治療が受けられませんでした。日本大学専門部出身の歯科医科士官から、海軍病院への入院を勧められましたが、次期出撃要員に決定していたため、我慢して入院を拒んでいました。その状態で、終戦を迎え、復員することとなりました。

（高橋）



昭和18年秋 出征前の柔道部員
左から2人目石岡貢（同氏蔵）



光基地跡に建つ「回天の碑」



平生基地跡に建つ阿多田交流館前に置かれた、人間魚雷「回天」のレプリカ

学徒出征数調査報告

昭和12年度～20年度の在学学生を対象として、平成26年7月～27年7月にかけて該当する学部の学籍簿及び授業料台帳などによる調査を実施しました。前号で中間経過を報告しましたが、基礎調査を終え、集計結果をまとめました。なお、出征とは本来は戦地へ赴くことですが、本調査では陸海軍に入営した時点で出征者として扱いました。

基本的に在学中の出征者を扱っていますが、在学期間が短縮された昭和16年度以降は、卒業後の出征者も含めています。また、本誌で紹介した伊熊二郎や石岡貢など、出征が確認されている人物で出征時の学籍簿に記録がない例もあり、それらも加えています。

総数は7,484人。やはり、在学徴集延期臨時特例による学徒出陣のあった昭和18（1943）年度が、2,094人と3割近くを占めています。年度不明者の多くも、昭和18～19年度と思われます。卒業すれば軍医候補となる、専門部医学科や医学部予科にも該当者がいたことは、意外な結果でした。戦没の記録があった者は90人でしたが、実数の一部と思われます。学徒兵の戦没情報がございましたら当課までご一報願います。年度・部科ごとの詳細は、次頁に一覧を掲載しています。今後は、刊行物や外部機関所蔵の資料と併せての調査・分析を進めていきます。

（高橋）

学徒出征数調査の集計結果出る

学内資料による日本大学学徒出征数（昭和12年度～昭和20年度）

年 度		昭和12年度		昭和13年度		昭和14年度		昭和15年度		昭和16年度	
部 科		出征	戦没	出征	戦没	出征	戦没	出征	戦没	出征	戦没
学 部	法文学部(法政系:現法学部)	12	1	8	0	7	0	3	0	17	0
	法文学部(文系:現文理学部)	19	2	21	0	15	0	2	0	22	0
	法文学部(芸術科:現芸術学部)※										
	商経学部(現経済学部・商学部)	4	0	3	0	3	0	10	0	14	0
	工学部(現理工学部)	5	0	6	0	3	0	5	0	13	0
	農学部(現生物資源科学部)										
小 計		40	3	38	0	28	0	20	0	66	0
予 科	文科	2	0	5	0	4	0	3	0	4	0
	理科	3	0	9	0	6	0	2	0	0	0
	医学部										
	農学部(現生物資源科学部)										
	小 計		5	0	14	0	10	0	5	0	4
専 門 部	法政系各科(現法学部)	18	2	32	2	40	0	31	1	94	0
	文系各科(現文理学部)	10	0	11	0	15	0	7	0	42	0
	拓殖科(現国際地域開発学科)	1	0	2	0	0	0	0	0	6	0
	芸術科(現芸術学部)※										
	商経系各科(現経済学部・商学部)	25	1	48	1	48	0	10	0	77	0
	工科(現工学部)	5	0	15	0	6	0	2	0	15	0
	医学科	3	0	3	0	4	0	1	0	2	0
	歯科	11	1	12	1	5	0	4	0	12	0
	小 計		73	4	123	4	118	0	55	1	248
高等師範部		29	1	23	0	16	0	5	0	34	0
高等工学校		59	3	117	0	117	0	68	0	134	1
歯科医学校		4	0	0	0	0	0	0	0	1	0
東京高等獣医学校(現獣医学科)※※		3	0	4	0	1	0	0	0	2	0
合 計		213	11	319	4	290	0	153	1	489	1

※ 芸術学部は、火災で当時の文書類が焼失しているため、他の資料から確認できた人数を記載した。
 ※※ 東京高等獣医学校は、当時は本学と別法人の教育機関。昭和26年に日本大学に合併した。
 農学部は昭和18年設置、同年度から予科、20年度から学部が開講。
 医学部は昭和17年設置。同年度から予科開講、本調査では学部の出征に関しての記録はなし。

◆◇ 本年8月15日現在で「7,484」人 ◇◇

平成27年8月15日現在

昭和17年度		昭和18年度		昭和19年度		昭和20年度		年度不明		合計	
出征	戦没	出征	戦没	出征	戦没	出征	戦没	出征	戦没	出征	戦没
12	0	275	2	136	0	22	0	338	4	830	7
15	0	203	2	44	1	13	0	11	0	365	5
								7	0	7	0
15	0	529	6	129	1	23	0	47	7	777	14
21	0	98	0	23	0	2	0	17	7	193	7
						12	0	0	0	12	0
63	0	1,105	10	332	2	72	0	420	18	2,184	33
4	0	55	0	27	0	0	0	1	0	105	0
8	0	0	0	0	0	0	0	1	0	29	0
0	0	1	0	1	0	0	0	1	0	3	0
		0	0	5	0	0	0	18	0	23	0
12	0	56	0	33	0	0	0	21	0	160	0
59	0	88	1	351	0	83	0	760	4	1,556	10
21	0	37	0	35	0	5	0	13	0	196	0
5	0	28	1	79	0	37	0	5	0	163	1
1	1	6	0					20	0	27	1
46	0	434	4	315	1	125	0	169	16	1,297	23
6	0	11	0	11	0	1	0	21	7	93	7
6	0	0	0	0	0	0	0	1	0	20	0
6	0	17	0	21	0	2	0	7	1	97	3
150	1	621	6	812	1	253	0	996	28	3,449	45
11	0	168	1	27	0	7	0	51	0	371	2
133	1	137	1	288	0	118	1	112	2	1,283	9
6	0	1	0	3	0	0	0	4	0	19	0
1	0	6	0	0	0	0	0	1	1	18	1
376	2	2,094	18	1,495	3	450	1	1,605	49	7,484	90

出征数については、1人が2回出征している例もあるため合計は延べ人数。

戦没者数は、遺族などからの通知が大学にあった数であり、実数の一部である。

- ◎ 徴集延期の上限年齢は大学学部生では27歳だったが、昭和14年に25歳、16年には24歳となった。18年10月には文系学徒の徴集猶予が停止され、同年末に徴兵年齢が19歳に下げられた。

創立者上條慎蔵の顔（肖像写真）

本誌第6号で、日本法律学校創立者の一人上條慎蔵について唯一顔が分からないと書きました。その後も上條家で調査を続け、明治時代から残る写真アルバムの中から、ようやく1枚の写真にたどり着きました。

明治39（1906）年5月10日付『信濃毎日新聞』（第8477号）は、海軍の伊東（祐亨）元帥・東郷（平八郎）大将・上村（彦之丞）中将の3将軍が、長野市善光寺で催される「全国日露戦役戦病死者追弔会」に参列焼香するため長野に来県することを報じています。しかし、この3将軍の長野来県は公式な行事ではありませんでした。

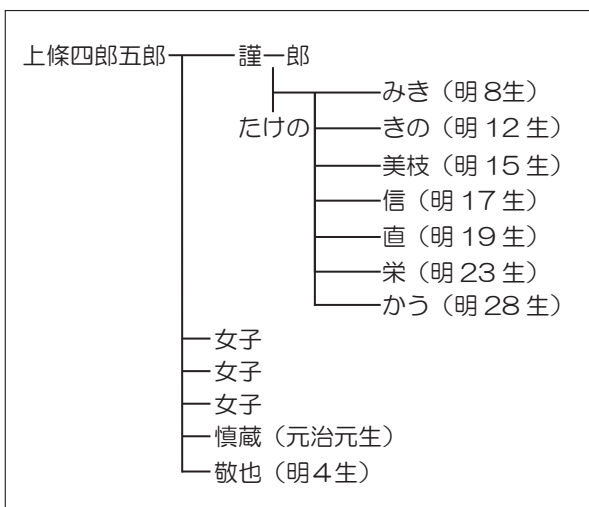
伊東元帥に10数年來知遇を得る上田町の飯嶋七郎兵衛は国分寺（信濃国分寺）の幟の揮毫^{きごう}を受けるため上京し、伊東邸に赴いたときに初めて信州巡覧の意向を知らされました。5月の靖国神社大祭後に、東郷大将を伴って出発するつもりなので世話を願いたいということでした。驚いて麴町区の東郷邸を訪れて確認をしたところ、善光寺での戦死者弔魂祭に参列するよう、大山長野県知事・鈴木長野市長などに懇請されてのことで、伊東閣下からも誘われたので同伴する（後日、上村中将の同行希望が判明します）というのです。大変な栄誉だと感激した飯嶋は、帰郷して親族・知己などに3将軍歓迎の意向を確かめ、親族や地元有志26名とともに歓迎の準備に着手したのです。

こうして5月10日、飯嶋の先導による伊東元帥一行が長野に旅立ちますが、この3将軍信州巡覧の顛末を飯嶋自身が後日に書き記したのが「吾家之紀念」（私家版）です。この「吾家之紀念」のなかに、伊東元帥の上條家滞在の様子が記されています。



吾家之紀念
（上田市立博物館蔵）

5月14日、善光寺忠霊殿における戦病死者忠魂祭が終了すると、伊東元帥は上下の諏訪神社にも参拝したいと飯嶋に持ち掛けました。しかし、飯嶋は南信方面には詳しくないので、代わりに親族の上條謹一郎に案内を頼むことで了解を得、以後は謹一郎が先導することとなりました。しかも、新村の上條家滞実が実現することとなったのです。帰京する東郷・上村両将軍と別れ、伊東元帥一人、謹一郎の案内で松本行列車に乗りこんだのです。



上條家族構成

松本での宿泊は、浅間温泉の「目の湯」旅館。翌15日に出発した元帥は松本町の小学校・中学校・女子師範学校を巡歴した後、新村の上條家に到着しました。そして、「休憩の後記念写真の撮影を懇請し一族と共に庭園に於て撮影せり」（「上條家の歓迎」の項）とあるのです。次頁上掲の写真がそのときのもと思われるこれ1枚のみ存します〔ただ、この写真は原版ではないようです。よく見ると、中央縦に折れ目が写っており、元の写真を撮り直したと思われる〕。

当時の上條家の家族構成は、当主謹一郎・^{たけの}竹野夫妻と子供3男4女（信・直・栄・みき・きの・美枝・かう）と、謹一郎の弟慎蔵・敬也になります。なお、謹一郎の長女みき・次女きの、謹一郎の兄弟の女子3人は、当時上條家にはいないので、説明は省きます。

写真から紹介してみましょう。灯籠の前にたたずむのが伊東元帥。その前に腰掛ける人物が飯嶋七郎兵衛です。灯籠の左側に立つ口髭の人物が謹一郎で、その前に3人の子供（美枝・栄・かう）と中央椅子に掛けているのが妻のたけのです。元帥の右に立っているのが長男信で、その右に立つのが直になります。信・直兄弟は2歳違いですが、信は身長が約180cmもの長身なので、直が子供っぽく見えます。直は、この直後に士官候補生として陸軍に入隊します。ここに写る謹一郎の家族はこれで全員です。



		謹一郎			
上條慎蔵	栄	美枝	伊東元帥	信	直
	かう	たけの	飯嶋		

さて、残るは左端の人物で、慎蔵〔第6号で慎蔵は三男と記しましたが、二男と判明、訂正します〕か敬也のどちらかということになります。慎蔵は明治24年に病氣療養を理由に宮崎県参事官を辞職して新村の上條家に戻り、10数年療養を続けていますが、慎蔵自身は「宿痾」つまり、持病だと言っているの

で、写真の撮影に出るくらいは出来たでしょう。

上條家では敬也は「屯田兵で北海道に行って、居ない」とされています。敬也の没後、遺品類は上條家にもどされていますが、当時北海道でどのような生活を送っていたのか、松本の本家とどのような連絡をとっていたかを知らせる私信などはあまりありません。そのような中で、明治42年8月、敬也は兄謹一郎に亡父母の諡号（おくりな）を書いて送ってくれという手紙を出したようで、謹一郎は求めに応じて返信します。父四郎五郎は明治32年に、母やえ子は38年に没しています。謹一郎は「朝夕御追善之方可然と存候」と書き添えています。敬也が松本と疎遠であった様子がうかがえます。そして、送り先の住所は「北海道函館区谷地頭町一」となっています。その地には、当時函館要塞（函館砲台）司令部（昭和2年に津軽要塞に改組）が置かれていました。

明治4年生まれで敬也が成人してから「屯田兵」に行ったとして、それは明治20年代後半に入り、北海道の警備は、日清戦争を期に屯田兵を中心として創設された第7師団に代わっていく時代になります。30年代になると函館においては、陸軍関係の諸機関が設置され、36年要塞司令部も函館地頭町に移転してきました。屯田兵制度は37年に廃止されるので、敬也は引き続き軍関係に従事していたのかも知れません。45年2月、慎蔵逝去の際は、病気で治療を続けているため葬儀に行けないとの書簡を上條信宛（謹一郎は43年に死去）に出していますが、住所は函館区曙町三番地となっています。こちらは「自宅」か、地頭町から転居したのか分かりませんが、敬也は長く北海道（函館）に留まり生活していたのであり、この伊東元帥が訪れた頃も新村にはいなかったと考えられます。

以上のことから、この写真の左端の人物がほぼ上條慎蔵で間違いのないと思われます。

（文中敬称略）

（田淵）

第2回全国大学史展「学生たちの戦前・戦中・戦後」開催



7月3日（金）から8月2日（日）まで、明治大学博物館特別展示室で全国大学史資料協議会東日本部会主催の第2回全国大学史展「学生たちの戦前・戦中・戦後」が開催されました。

今回の企画展では、第一次世界大戦後における高等教育機関の拡充期から、第二次世界大戦、戦後改革を経て高度経済成長期までの学生生活が取り上げられ、本学からは実物資料5点、写真6点を展覧いたしました。

展示構成は4部構成で、「戦前の学生たち」では、1920年代の学生数増加と就職難、学生新聞や部活動などの課外活動の充実、関東大震災と学生、軍事教練の開始などが取り上げられました。学習活動を示す資料として展示された日本女子大学成瀬

記念館蔵「日本料理、西洋料理、お洗濯実習」受講ノートが、丁寧にまとめられていて印象に残りました。

「戦中の学生たち」は、日中戦争のはじまる昭和12（1937）年から終戦前後までが展示対象となりました。このコーナーは時系列に資料が配置されており、学生たちが序々に戦時体制に組み込まれていく状況について実物、写真資料を用いて解説していました。ここでは、本学所蔵の軍事教練で使用したと思われる「信号ラッパ」と、「戦時学徒体育訓練実施二関スル件」という資料の2点が展示されました。

「戦後の学生たち」では、戦後復興や戦後学生の学生生活、課外活動などが取り上げられました。「学徒兵として入隊し復学した学生による卒業式の答辞」（東北大学史料館蔵）は科学と技術より人間性を優位せしめるべきというもので、戦争を体験した学徒兵の言葉の重みを感じる内容でした。

時代に沿った展示のほかに、トピック展示として「写真でみる学生生活」というコーナーも設置されました。ここでは、学生の学内生活として学園祭の写真、学外生活として都内名所・学校近隣の写真が展示されました。各時代、各大学の様々な写真が並べられ、複数の大学が参加した今回の企画展だからこそ実現できた企画だったと思います。

また、今回は映像資料の閲覧スペースが設けられ、各大学が所蔵する映像資料も公開されました。映像資料は、撮影当時の時代の雰囲気がよくあらわれていて、長時間視聴する見学者の方も多かったようです。



今回の企画展は複数の大学・機関の資料をもとに構成したため、時代・分野的にも幅広い内容となりました。今後、個々の大学で深く掘り下げた内容の展示を実施することで、今回の企画展の成果をより高めることに繋がると思います。そのためにも、本学の学生生活関係資料を今まで以上に調査・収集し、展示などに活かしていきたいと思っております。

（松原）

桜門会館で大学史展示を開催中

本年4月より、市ヶ谷の日本大学桜門会館1階フロアで大学史展示を開催しています。桜門会館を利用する本学校友・関係者に本学の歴史について、少しでも興味をもってもらえるようにという目的で、校友会本部事務局と大学史編纂課が協力して企画しました。4月～5月は校友会発足の頃というタイトルで明治20年代の本学関連資料として、第1回日本法律学校卒業式の答辞草稿と明治32（1899）年の日本法律学校校友会会員名簿を展示しました。

展示ケース1台の小さな展示スペースですが、これからも本学の歴史を様々な角度から紹介していきたいと思えます。お近くにお越しの際は是非お立ち寄りください。



全国大学史資料協議会東日本部会総会



記念講演

その後、早稲田大学史資料センターの方の案内で大隈講堂、建学の碑、大隈記念室、大隈重信銅像など、早稲田大学キャンパス内の施設や記念碑などを見学しました。大隈講堂では、普段は見る事ができない時計台の内部も見学することができました。早稲田の歴史と伝統を肌で感じる事ができた充実した総会となりました。

6月3日、早稲田大学早稲田キャンパス大隈会館で2015年度全国大学史資料協議会東日本部会総会が開催されました。総会終了後には、早稲田大学文学学術院の真辺将之准教授による「早稲田大学における編纂事業のこれまでとこれから—『早稲田大学百五十年史』に向けて—」と題した記念講演が実施されました。平成44年に150周年を迎える早稲田大学は本年から編纂事業が本格始動したとのことで、これまでの編纂事業とこれからの課題についてご講演いただきました。



大隈講堂内の大隈重信像

皆様のご意見をお寄せください

刊行物に関するご意見・ご要望 大学史に関する問合せ先

日本大学広報部大学史編纂課 E-mail: nuhistory@nihon-u.ac.jp

TEL 04-2996-4555 FAX 04-2996-4592

活動報告

平成26年10月～平成27年3月

○調査研究

26年

- 10月3日 飯塚高宏氏（山岡萬之助令孫）聞き取り調査（山岡記念文化財団：東京都）
- 10月8日～10日 全国大学史資料協議会総会・全国研究会（桃山学院大学・大阪大学）
- 10月15日 創立者（長森藤吉郎）関係調査（青山霊園：東京都）
- 10月19日 「大学駅伝と青梅電気鉄道」展の調査（立川市歴史民俗資料館）
- 10月22日 日本大学付属中・高等学校の自校史教育に関する情報交換会に参加（日本大学会館）
- 11月5日 旧日本大学医学部付属駿河台病院関係資料調査（同病院）
- 11月12日～14日 全史料協全国大会への参加及び佐賀市内での長森藤吉郎関係資料調査（福岡県福岡市及び佐賀県佐賀市）
- 12月8日 日本大学カザルスホール関係資料調査（お茶の水キャンパス）

27年

- 3月13日～14日 創立者（上條慎蔵）関係調査（長野県小布施町及び松本市）

○講演

26年

- 11月26日 商学部初年次教育での学祖講演（同学部）
- 11月29日 理事長特別研究研修会での大学史講演（日本大学会館）
- 12月17日 付属高等学校・中学校教員採用内定者オリエンテーションでの講演（日本大学会館）

27年

- 3月10日 新規採用教職員研修での学祖講演（日本大学会館）

大学史編纂課だより

第9号

2015年9月25日 発行

編集・発行 日本大学広報部大学史編纂課
〒359-0003 埼玉県所沢市中富南4-25
TEL 04-2996-4555 FAX 04-2996-4592

印刷 株式会社 文成印刷

(2015.9.25 5000)